

本校では、新学期のスタートにあたり、学年ごとにオリエンテーションを行っている。各学年とも最初に校長が話をする機会をいただいている。私としては、体育館で全校生に向けて話すよりも距離が近く、その学年に応じた話ができるので、非常にありがたいと考えている。

校長の後には、教務部長、生徒指導部長、進路指導部長、学年主任などが話すことになっている。校長の話は、中身を間違えると、ただの前座で終わってしまう。また、校長の話は一般的に長い。長すぎる。あまりにも長いと、いくら内容のあるいい話をしても長いという印象しか残らない。

新年度が始まるにあたり、生徒は一人一人、あれこれと目標を定めていることだろう。あるいは、夢や志を持っている生徒もいるに違いない。考えていると、やりたいこと、やるべきことがどんどん増えていく。いつの間にか、いったいどこから手をつければいいのかわからなくなるという事態に陥ることも考えられる。

そこで、お勧めしたいのは、何事3つで3つの目標、あるいはもっと多くの目標があったとしても、まずは「これだけは」という一つを決めることである。一つことを必ずずっとやり続けるのである。すると、なぜか他のこともうまくいくようになる。これを“ハンカチの法則”と言う。

折り畳んであるハンカチを広げる。真ん中を指でつまむ。つまんだまま上に上げていく。当たり前前だがつまんだ部分を頂点としてハンカチ全体が上がっていく。このつまんだ部分が「これだけは」と決めた一つのことである。そして、つまんだ部分と一緒に上がっていくハンカチ全体が、2番目、3番目以降の目標である。

高校生の場合で具体的に考えてみる。例えば、「1年間学校を休まない」ことを「これだけは」の一つの目標としたとする。高校には皆勤賞もある。意義のある目標である。このことを意識して生活していると、規則正しい生活ができたり、体調管理に気をつけたりするようになる。決まった時間に学習をするようになるかもしれない。毎日部活動に参加した結果、中心メンバーとして活躍するかもしれない。一つのことを意識して続けているうちに、いろいろなことが付随してくる。

教員であれば、「仕事に関わる提出物を締切の3日前までに出す」ことを必ず続ける目標にしたとする。私の経験からすると、締切ギリギリに出す方や締切に間に合わない方にはミスが多い。そして質も下がる。一方、余裕を持って出す方の場合は、ミスが少ない。例えミスがあったとしても締切まで余裕があるので間に合う。質も担保されている。締切を決めることで、そこから逆算して仕事のスケジュールをたてるようになる。プライオリティ（優先順位）を考えるようになり、タイムマネジメントができるようになる。このようになると、机の上も整理整頓が行き届くようになるかもしれない。結局、“仕事ができる人”になれる。

まずは、何を指でつまむか、何を一番にもってくるかを考えなければならない。年間を通してずっとできそうなものでなければならない。やり続けるという覚悟も必要である。人は何か一つでも意識して生活することが重要なのであろう。意識するということは考え、行動するということである。

学年オリエンテーションでは、“ハンカチの法則”について、以上のような話を高校生向けバージョンで話した。何か目標を持って生活しようというよりもハンカチを使いながら“ハンカチの法則”と言ったほうが印象に残るし、きっと言葉として記憶に残るかもしれない。生徒の前で広げたハンカチは使い始めたばかりの新しいものにしたのは言うまでもない。